

6－8					
主題	排泄ケアにおける困難事例に対してのチームアプローチ				
副題	よりよい排泄ケアの実現に向けて				
キーワード 1	排泄ケア	キーワード 2	なし	研究(実践)期間	48 ヶ月

法人名	社福) 白十字会	事業所名	特別養護老人ホーム白十字ホーム
発表者(職種)	笹怜奈(介護職員)、三種充世(介護職員)		
共同研究(実践)者	西村友希(看護師、排泄アドバイザー)		

電 話	042-392-1375	FAX	042-392-1255
-----	--------------	-----	--------------

事業所紹介	1967年に東京都で10番目の特別養護老人ホームとして設立されました。「となりのトトロ」のモデルになった八国山の麓に建つ従来型の施設です。182名(内ショート12名)の方が各フロアに分かれて生活しています。
-------	---

《1. 研究(実践)前の状況と課題》

当施設では、排泄アドバイザーを導入し、排泄委員会を中心として排泄ケアの悩みや困難事例に対して解決に向けて取り組んでいる。

排泄ケアに関わる時間は多く、利用者、職員共に負担感を感じる事も少なくない。排泄に関しては専門的な知識を持つ職員が少なく、困難な事例に対して検討をするもうまくいかないことの方が多かった。根拠となる知識も浅く「この人はこういう感じだから仕方がない」と諦めていたことが多かった。

排泄の専門的な知識を持った排泄アドバイザーを導入し、よりよい排泄ケアの実現にむけて取り組むこととなった。

《2. 研究(実践)の目的ならびに仮説》

排泄アドバイザーの導入を通し、これまで改善が期待できなかった排泄ケアにおける困難事例が解消及び改善されるのではないだろうか。それにより利用者、職員共に負担の軽減が期待でき、個々にあったケアの提供が行えるのではないか。

排泄委員を中心に、排泄アドバイザーから得た知識を活用し今後の問題解決に向けて役立てる事が可能ではないだろうか。排泄委員だけでなく、白十字ホームの排泄ケアに携わる職員全体の知識・技術の向上と興味関心の獲得が期待できる。これにより、ホーム全体の排泄ケアのレベルの水準が上がるのではないか。

《3. 具体的な取り組みの内容》

実際に排泄委員会内で各フロアでの悩んでいる事例を挙げ、排泄アドバイザーに利用者に関

わってもらふ。

今発表では、そのうちの2例を挙げる。

- ① 経管栄養の利用者の繰り返す便失禁について
- ② コミュニケーションに問題があり、排便困難を抱えているショートステイの利用者の問題解決に向けて

利用者の排泄方法や身体状態などを直接みていただき、頂いたアドバイスを基に改善・解決に向けて、フロアで取り組みを行う。

《4. 取り組みの結果》

- ① 食物繊維の追加により、便性状の改善と便失禁の回数の減少見られる。皮膚トラブルも起こすことなく経過。
- ② 中国語を話せる職員を中心に翻訳アプリを活用し、コミュニケーションを図る。排尿、排便コントロールを行いご本人の痛みや不快感の軽減とご自宅のケアに繋げる。

《5. 考察、まとめ》

排泄アドバイザーを導入してから、より排泄ケアに対しての意識を強く持つようになった職員が増えたと感じる。以前までは、「この人はこういう感じだから仕方がない」と諦めることや、忙しさを理由に問題解決までに踏み込めないこともあった。排泄アドバイザーというより専門的な相談の窓口ができ、道筋を示してもらうことで問題解決に取り組みやすくなったのではないかと考える。

排泄ケアに関わる時間も多く、意識しないとただの流れ作業のようになってしまう事も少なくない。排泄アドバイザーを導入して、今まで下剤の量やオムツの大きさなど対症療法的なやり方でしかアプローチ出来なかった困難な問題にたいして、より専門的にそして多角的に捉える事が出来るようになった。また排泄委員や看護師だけでなく、フロアの職員全員が排泄ケアについてより関心を持つようになり、利用者個人の問題ではなくフロアの問題、課題としての問題解決意識が芽生えるようになったと感じている。

《6. 倫理的配慮に関する事項》

なお、本研究(実践)発表を行うにあたり、ご本人（ご家族）に口頭にて確認をし、本発表以外では使用しないこと、それにより不利益を被ることはないことを説明し、回答をもって同意を得たこととした。

《7. 参考文献》

「慢性便秘症診療ガイドライン」（2017）、日本消化器病学会、慢性便秘の診断・治療研究会、南江堂

《8. 提案と発信》

今後も排泄アドバイザーを活用していくことで、日々変化していく利用者の身体状況に合わせたケアの提供が今後も行えると考えます。アドバイザー含む排泄委員だけでなく、各職員それぞれが排泄ケアに関心を寄せることで更によりよいケアが行え、利用者の生活の質の向上にもつながっていくのではないだろうか。